アーカイブ室新聞　（2010 年 4 月 1 日　第 307 号）

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室　中桐正夫

＊　子午儀資料館、ゴーチエ子午環の見学アクセス道路完成

レプソルド子午儀を発掘、復元、整備し、国立天文台に残った数点の子午儀を集め、子午儀資料館を 2007 年 12 月に開設した。またゴーチエ子午環は 2007 年 4 月からガラス見学室から見学できるようになっていたが、見学コースの道路からそれらの建物への見学道路は無く、雨の日などは不自由をしていた。2009 年度の工事としてこれらの建物へのアクセス道路が整備された。写真 1 が子午儀資料館への見学道路です。

写真 1　子午儀資料館への見学道路

この工事と並行して、見学案内などの看板類の整備も行われ、すっきりと整備された。筆者が書いた木製の看板が残されているのは趣があっていいと思っている。

ゴーチエ子午環へのアクセス道路（写真 2）も整備され、この工事に伴い普及室で設置した案内板がすこし位置を変えたが、これも新しい案内と共にすっきりとした。

考えてみると、これらが現役で活躍していた頃には、これらの建物にはきちんとしたアクセス道路が無かったのであろうかという思いがわいてきた。観測者はもちろん舗装されていない道路を真っ暗い夜中に歩いて観測施設に向かったのであろう。古い建物配置図、

航空写真を見ると現在の道路とは確かに違っている。旧図書庫と 2010 年 3 月 31 日竣工の ALMA 棟の間の道路は、レプソルド子午儀室の中心とゴーチエ子午環の中心線を結ぶようになっていたことがうかがわれる。

写真 2　ゴーチエ子午環への見学アクセス道路

麻布飯倉にあった東京天文台が三鷹に移転した頃、各主要観測装置を中心にきちんとした東西南北の道路が整えられていたことがうかがわれる。写真 3 は撮影年の記載はないが戦前の東京天文台の航空写真である。この頃の方が構内が整備されていたように思うがいかがでしょうか。昭和 20 年（1945 年）2 月 8 日に焼失した威厳のある本館も写っている。筆者が長年占有して観測に使った卯酉儀と呼ばれた観測ドームも現在のすばる棟北側の道路の真ん中にデンと立っている。

この写真は、眺めていて見あきることがないほどいろんな情報が詰まっている。アーカイブという仕事を始めた筆者にとっては貴重な写真である。かすかではあるがヨーロッパの報時信号を受信したフランス・ビルドに向いたアンテナの 60m 鉄塔 4 本も写っている。そして電波観測施設のかけらも見えない光景、広々とした天文台構内には畑が整然と並び、グランドも畑だったようだし、天文台南の野川沿いの水田の様子も写っている。

現在の森と化した天文台構内と、このように開けた光景であった天文台の構内と比較する必要はないが、感慨にふけるのは自由であろう。

この風景の頃は、見学者が自由に歩き回るということも無かった天文学者の隔絶された

社会であったのかもしれない。

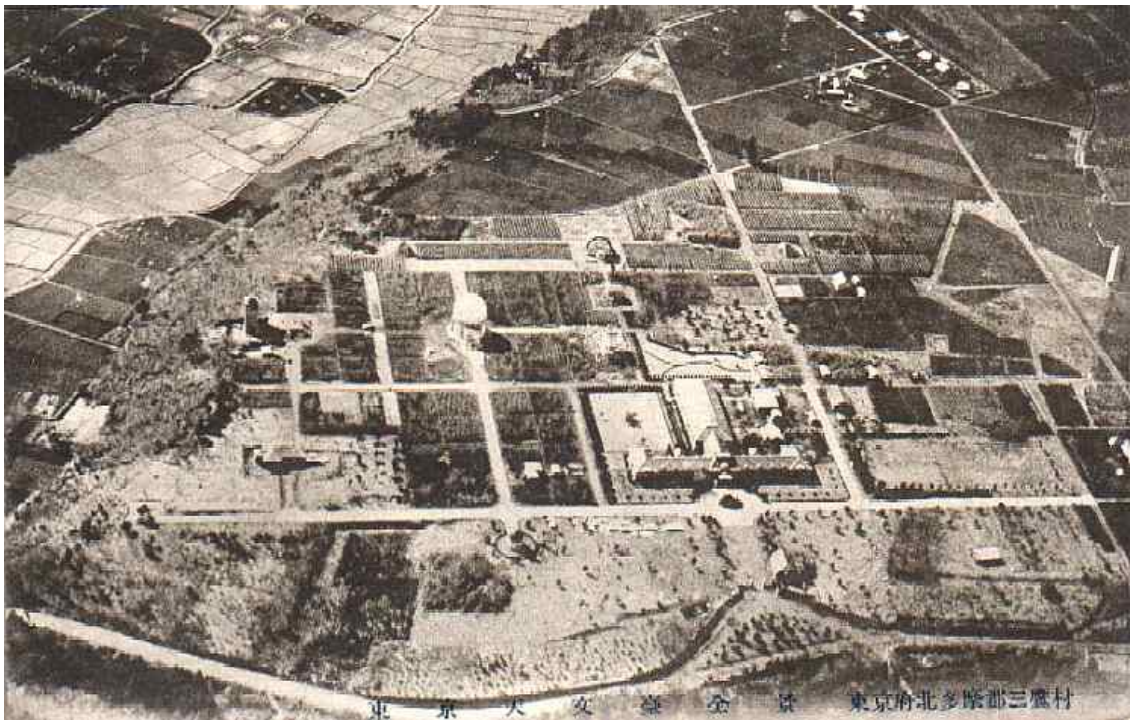

写真３　むしろ整然とした昔の東京天文台構内